

トップガンジャーナル



Journal of TopGun

令和2年3月17日 第63号

活動レポート

東京大学大学院農学生命科学研究科 附属水産実験所「浜名湖をめぐる研究者の会」訪問

令和元年 トップガン事業のプログラムとして、研究施設訪問を企画しました。この訪問プログラムでは、研究者のプレゼンテーションにふれることで、自分たちも自由研究などで追究したことを相手にわかりやすく伝えること等、科学への関心を高めることをねらいとしています。訪問は、公立・私立・附属浜松中学生 21名、高校生 3名、中学校教員 1名、高校教員 1名、合計 26名が参加しました。

今回の参加校 静岡大学附属浜松中学校 / 三方原中学校 / 浜名中学校 / 曳馬中学校
浜松学芸中・高等学校（順不同）

1. 日程：令和元年 12月7日（土）
2. 場所：東京大学大学院農学生命科学研究科附属水産実験所
（浜松市西区舞阪町弁天島 2971-4）
研究棟 1F 学生実習室（ポスター掲示と口頭発表）
3. 内容：浜名湖をめぐる研究者の会 第28回ワークショップへの参観
「浜名湖をめぐる研究者の会」は、毎年12月に東京大学大学院農学生命科学研究科附属水産実験所で開催されています。この会には大学の研究者だけでなく、自治体、民間の研究機関、高校の生物・科学部、在野の研究者など様々な方が参加しており、発表は自然環境、環境を演出する生物、さらには人間活動を含めた地理的なものまで、バラエティーに富んだ内容となっていました。

「浜名湖をめぐる研究者の会」プログラム

- | | |
|--|--------------------------------|
| 1. 浜名湖における溶存酸素量の経年推移 | 山本佳奈恵（静岡県環境衛生科学研） |
| 2. 浜名湖、天竜川をめぐる里山、海岸林整備 | 山路淳（平尾の里山資本主義） |
| 3. 浜名湖発親うなぎ放流連絡会 | 須藤竜介（水産研究・教育機構）、斎藤仁孝（浜松市） |
| 4. 浜名湖におけるフナムシ2種の分布と系統分類 | 堀口弘子、針山孝彦（浜松医科大）、藤森文臣（遠州自然研究会） |
| 5. 2019年度 浜名湖におけるアマモ場での魚類相の季節変化 | 鈴木健友、内山達人、津坂鮎美、武藤文人（東海大海洋） |
| 6. 静岡のさまざまな水問題 | 戸田三津夫（静大工） |
| 7. カメの生育環境調査 —ミシシippアカミミガメの駆除及びカメの生息比調査— | 江塚笙真、上川誉斗（静岡県立磐田南高） |

8. 既存の有機汚濁指標を組み合わせて佐鳴湖の有機汚濁の謎に挑む
米倉佑（静大院総合）、戸田三津夫（静大工）
9. 佐鳴湖流域のネオニコチノイド系農薬の現状 辻野兼範（佐鳴湖シジミプロジェクト協議会）
10. 三河湾奥、豊川河口干潟・前浜干潟における底生生物の出現種数、生息密度及び現存量の変動—
2019年の市民参加による干潟調査結果— 野田賢司（愛知大学総合郷土研）、加藤正敏（みなと塾）
11. 失われつつある食文化の継承へのアプローチ —西伊豆 塩カツオの商品開発を例に
川本大智（東海大海洋）
12. 何が減災につながるか 巨大台風 19 号と伊勢湾台風 井上正男（市民環境ジャーナル）
13. 川エビを追う～両側回遊型のなぞ 松下洋夢（浜松市立三方原中）
14. モデリングの意味 杉浦享一（浜松市立三方原中）
15. ヒメハゼの感情と顔色変化の関連性 藤田匡信（浜松市立浜名中）
16. 赤いおなかのすもぐり名人 —アカハライモリをいっぱい増やそう—
堀田智仁（浜松市立曳馬中）
17. 赤色と緑色どちらが人気？ トウカイモウセンゴケの葉色の変化
磯部神威、樽林晴翔、白川巧弥、土屋柊人、伊藤信一（浜松学芸中・高）
18. シジミは川を遡る？～シジミの河川移動の可能性を個体数ピラミッドから探る～
大月悠雅、伊藤綾佑、山本大嗣、伊藤信一（浜松学芸中・高）
19. ハエトリグモは右利き？左利き？～ハエトリグモの行動特性から利き脚を明らかにする～
児玉拓海（浜松学芸中・高）、笠井敦（静大農）、伊藤信一（浜松学芸中・高）
20. 塩基配列解析を用いた貝類の判別
山谷拓巳、大森識照、杉浦栄輝、黒川悠馬（愛知県立豊丘高）
21. 舞阪漁港で水揚げされた遠州灘の深所性魚類 手良村知功、平瀬祥太郎、菊池潔（東大水実）
22. ノドグロヒメアンコウ *Lophiodes insidiator*(アンコウ目アンコウ科)の分布特性
江藤暁（東京海洋大）
23. キンメダイのオスメスの見分け方 木南竜平（静岡県水産技術研）
24. トラフグ属魚類の成熟と成長に関する遺伝学的研究
杉田周平、細谷将、城夕香、菊池潔（東大水実）
25. トラフグ属魚類の鰓の組織化学的比較
佐藤楽生（東大水実）、田角聡志（鹿大水）、中村修、筒井繁行（北里海洋）、菊池潔（東大
水実）
26. 2018 年秋の台風 24 号の前後で変わった天神森の姿 児島由依（静大附属浜松中）
27. 魚と光が変えるレタスの成長と味 Part II 石川 優（静大附属浜松中）
28. プラスチックからガソリンをつくる研究 堀場幸也（静大附属浜松中）
29. 島根県中海におけるカワウの食性 堀之内正博（島根大エスチュアリー研）
30. シロバナセンダングサについて 高鳥謙三
31. 地球の設計図 佐治良雄

※ No.13～19、26～28 の 10 件の発表がトップガンプロジェクトより

東京大学大学院農学生命科学研究科附属水産実験所で開催される「浜名湖をめぐる研究者の会」は、まさに名前の通り研究者の会ですが、同 大学 菊池 潔 教授のお計らいにより、子ども研究者も発表に参加させていただいております。口頭発表が終わり、ポスターの部になると大人の皆さまからあたたかなアドバイスをいただきました。下の写真は中高生の発表の様子です。



中高生による口頭発表の様子



中高生によるポスター発表の様子

解説

地域の自然に学ぶ

今年度も、浜名湖にある東京大学附属水産実験所が開催している「浜名湖をめぐる研究者の会」に、トップガンに参加している生徒が参加させていただき、研究発表も行いました。毎年、この会では様々な内容の研究が発表されており、今年も生物学に限らず、地学や環境も含めた多様な研究がそれぞれの専門家に紹介されていました。これは、「地域」をキーワードとする研究のまとまりに特徴的なことです。日本全体や国際的な研究者の集まり（いわゆる学会）では、どうしても類似するテーマの研究者どうしのコミュニケーションが主になりがちですが、今回の「浜名湖」というような地域を主題として集まると、そこに関連する様々な事柄を学ぶことができます。このことは、科学に限らず、どのような分野でも同じではないかと思います。今回参加した皆さんは多様な視点からの研究を参観し、また自らも発表することで、どのようなことを感じたでしょうか。これからの時代（実はこれまでの時代も）、ある物事をひとつの視点だけからみて判断するのではなく、いくつかの視点でみつめることが大切になります。参加した皆さんにとって、多様な視点から地域の自然を考える姿勢が身につくよい機会になったのではないかと思います。

（小南陽亮）

編集部子ども記者より

今回の「浜名湖をめぐる研究者の会」を通して、研究者の方々からお話を伺ったり、自分たちの研究のアドバイスをさせていただいたりすることができ、今後の研究の糧とすることができたと思います。自分自身の行っている研究に足りない点、改善すべき点に気づくと共に発表を聞いてくださった方から励ましのお言葉やお褒めの言葉もいただけたので「次からこのようにしていけば、さらによくなっていくかもしれない」というように新たな視点を得、また前向きな気持ちになることもできました。

この会で多くの研究者の方と交流ができた貴重な経験を今後の研究に存分に生かしていきたいです。

トップガン子どもジャーナル記者
中学2年 竹内 優月